

「書評」を通じ

—— カフカを読むために ——

藤川 晴 男

「秋の道のような。掃ききよめたかとおもうと、もう枯葉に覆われている」
カフカ

1 序

坂内 正 (さかうち ただし) 氏は1989年、創樹社より『カフカの「アメリカ (失踪者)』』を著わした。これにより同じ出版社の同著者による『カフカの「審判」』(1981年)『カフカの「城」』(1985年)とともに“カフカの三長篇の出版順序にあわせたように、『審判』論、『城』論、『アメリカ』論の順に”出揃ったことになる。

“三長篇の特質と、それらの作者における位置との関係で”出版の“事実的な偶然をこえたところで、ひそかな必然が働いていたようにも思う”と述懐する。

坂内氏がカフカの長篇解説にとりくんだそもそものきっかけは、『アメリカ (失踪者)』の“あとがき”にもあるように、“それまでに、カフカの殆どすべての作品について感じ、一方、なぜか全くといっていいほど無視されて論じられてきたもの、この作者の作品の深奥にひそみ、細部を象づくってその多義的多層的世界を創りだしているものについて、小説『審判』を読みこむ作業のなかで、問題提起 (傍点引用者)”することにあつた。

そうして、“はじめから意図して三長篇をつなぐ道を探ることはつつし”み、“前二著の場合と同様、その言述の意味を、その前後の関係と作者の当時の状況から、もっとも自然な私たちで解釈することを (傍点引用者) 第一に心掛けた”取りくみ方を先ず何よりも高く評価したい。坂内氏も言われるように、“それが前二著の基本方針だったという理由からだけではなく、“そのような作業の集積のなかからカフカ像は浮び上ってこなければならぬ、”という一貫した考えからで、三長篇を通じて、“ひとつのこの作家の道筋がおぼろげながらもみえて”くる。氏は“ひとつの錯覚”といいかけながらも、これらの著作 (第一作の『審判』は品切のために目を通すことは出来なかったものの) を読み終えて、戦後45年間の世界のカフカ研究史のおびただしい混乱のなかで、“なぜか全くといっていいほど無視されて論じられてきたもの”の空洞を埋めることのできる“より包括的理解のためのひとつの里塚”が、漸くここに日の目をみることになったと言っているかと思う。

ここでは本紀要でしばらくとり組んだカフカに関する拙稿作品を顧みながら、どうしても論をなせばなすだけ論理的な整合性はおろかあらぬ方向へとずれ込むカフカ独自の誘惑のまがまがしい思考法に出来る限りの資料を活用してメスをふるってくれたということ、なかんづくこれらの書物は“ヘブライ世界の特長”と、それとの係わりの極めて深い“無限”と“換喩”とかいった発掘作業に改めて教えられ、カフカの素顔にひきもどしてくれる喚起性

も顕著である。今までの論を省みながら思いついたままアトランダムにその辺にさぐりを入れてみることにする。

2 ヘブライ世界の特徴

一部小説『アメリカ』のなかでもみられ、小説『審判』が、フェリーツェとの交際の経緯のなかで生じた「ホテル内の法廷」に対する「自己保存のための戦い」であり、「自分の一切を携えて」小説『城』に「移住」しながら、それらのなかで、彼の実在自体の共時的多層性を言語によって表現し尽そうとしたとき、自身の資質の最内奥にある民族（ユダヤ）の父祖にまでも遡るものに出会い、それを全的に発現する。坂内氏はそれを“カフカ文学の非ギリシャ・西欧的特性——より正確に言えば、ギリシャ・西欧的特性が支配する世界にあって、それと背馳するヘブライ的特性として捉え、この特性が、“多くの多義多彩な解釈と解釈への試みを誘引するとともに、その多くを誤らせてきた”と解するのである。

ギリシャ・西欧的思惟の特徴が静的・空間的・視覚的・観念的なのに対して、ヘブライのそれは動的・時間的・聴覚的・具体的で（T・ボーマン「ヘブライ人とギリシャ人の思惟」植田重雄訳・新教出版社・57年）ある。「ヘブライ人の『概念』は『抽象性』と同程度に具体性を示し、集合性と同程度に個別性をも示し、何よりもその思考のもとになる「ヘブライ語では抽象的なものを具体的なものから切離して考えることはできない」（ボーマン）ということなのである。

紀要にかつて引用した覚えもあり、坂内氏も「カフカと抽象的な事柄について語るのは不可能であった。彼は比喩で考え、比喩で語った」（M・ブロート「フランツ・カフカ」辻・林部・坂本訳・みすず書房・72年）というブロードのこの比喩というのは具体ということだろう、と注している。この場合の漢字は譬喩を採りたい。このヘブライ的特性に強く彩られているとくに『審判』以降の作品を“前後の関係と作者の当時の状況”を絡めながら、ときに疑問符をはさみはさみ推理を十二分に働かせて、個別に分析の道を辿りつづける。“そこには個と一般、具体と抽象、肉体と精神、事物と意味といった二元論に導く契機はない。であればそれは、殆どすべての解釈の試みのなかに、ひそかにでもせよ必ずといっていいほど仕掛けられていた「それは何か」という、無前提的に二元論を前提とした設問を無効にし、それはそれであるという答えしか返すことのできない世界。少なくともそのことをまず意識した上で発問しなければならないような世界なのである。「ヘブル思想の特別な形式と独自の問題提起の分析は、不可避的にギリシャ哲学の範疇と問題提起を疑問視するように導いていく」（C・トレモンタン「ヘブル思想の特質」西村俊明訳・創文社・63年）。カフカ文学の難解さ、例えば、『城』ならば城、『審判』ならばその審判、法廷を、「それは何か」という設問で問うたら最後、解釈は解釈を呼んでほしくない迷宮世界に導いていくカフカ文学の難しさは、カフカ文学のこのようなヘブライ性とかかわっている”（傍点引用者）らしい。

“しかし他面、個が個であることにおいて一般を分有し、具体が具体であることにおいて観念を分有し、一方、一般や観念は個々の事物や具体を通してしか表われない世界ということは、その具体や個の事物が絶えずそれが分有している意味への誘いを内包しているということである。「それは何か」というカフカ文学への発問は、それ自体自然なことであり、実はカフカ文学の特徴といわなければならない”ということに帰着しよう。

私事にわたって恐縮であるが、1976（昭和51）年ドイツ学術交流会（DAAD）による三ヶ月の招待を受け、指導教授の Hartmut Binder（“カフカ便覧”などカフカ研究文献書多数）を斡旋していただいた貴重な仲介者でもあった碩学 W・エムリッヒをもの見事に批判してある個所は、特に目を惹いたものである。エムリッヒの『カフカ論II』（志波・加藤訳・冬樹社・71年）が出るに及び、それまでの“カフカ論”は究められたかに思われていた（故高安国世先生の推挽にあずかる）のであるから、その本質に迫る坂内氏の論旨をここに紹介しておくだけでも執筆者の意図は半ば達せられたようなものである。すなわち、

——比喩、寓意、象徴がカフカ文学のいわば標識であった。ところが、ヘブライ的思惟世界にはもともと、これらの語がともかくも前提としている具体と意味の二分法がない。この特性の滲透しているカフカ文学を「彼岸としての此岸」^{アンチメルヘン}「反童話」とか「反神話的神話」といった形容矛盾の自家撞着語で結論づけられたのはむしろ当然のことであるという前提のもとに、前述のエムリッヒの引用がはじまる。おおよそ坂内氏の又借りになるが、「これは厳密な意味ではパラールではありえない。なぜなら寓話的あるいは比喩的な叙述は必ずある特定の意味ないし概念を指し示しているのであって、例えば三つの指環についてのレッシングのパラールは、三つの指環において三つの宗教（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教）を一義的に（疑う余地なくはっきりと）表示しているのである。しかるにカフカ文学の特質は、そこに叙述されている諸現象、出来事、談話の『背後に』一義的に特定の意味をもはや固定することができず、したがって、カフカの宇宙的なものは哲学的、神学的ないし一般に世界観的な概念語で言い換えることがまったくできないという点にこそ、その特色の特色たるゆえんがある。」「アレゴリーとかパラールとかの概念はそれゆえカフカの諸作品には適法に應用されえないのである。この概念の使用は混乱をひき起すもとであって、すでにこの上もなく不幸でこの上もなくばかげた数々の解釈の試みを促したのである。」

ここまでの引用をふまえて頭上に投ずる坂内氏の切論に耳をすませば、“ここまで追ってきてなぜエムリッヒは、その特性が、これらの適用語の前提にある個と一般、具体と抽象（観念）の二分法をもたない、彼自身が扱っているようにみえるギリシャ・西欧世界の思惟方法と対立するもうひとつの世界、もうひとつではあるが西欧文化の底に流れ込み、ときにはその文化の根底に対する異議申し立てともなってきた、この作者自身の出自であるヘブライ世界の特性であることに思い至らなかつたのであろう。それとも、思い至らないまでも、頭に浮べることくらいは勿論あったにしても、純正ドイツ文学研究者としての不要な衿持がこの方向にそれ以上掘り下げてみることを禁じてしまったのだろうか。”とゲーテ学者でもあるエムリッヒの泣きどころを衝き、エムリッヒによるカフカ論の精髓ともいべき中心の引用にかかってゆく。

“「したがって厳密な意味ではもはや決してアレゴリーでもパラールでもないのである。」以上のことから、「カフカ文学の構造は、ゲーテこのかた『象徴的』^{シンボリック}と呼ばれている文学形式と一脈通じるものがあるように思われるかもしれない。」しかし「カフカの場合には事情はまったく異なっている。」「ゲーテの場合、詩的直観と象徴化は事物の真の本質を顕現させ、宇宙的根源現象を開示するのに、カフカの場合にはそれと逆に、直観と詩作という行為は人間と事物の直理、さらには人間と事物の現実性を破壊するのである。それゆえ、カフカについては、象徴ということはもはや問題になりえない。彼の詩作はアレゴリー

でもジンボーリッシでもない」のであって、カフカの作品のなかでは「『^{ジンボール}象徴』という言葉はその意味を喪失し、「どちらかといえばある種の直喩的性格を所有しているのであるが、従来の美学や詩学はこうした性格を言い表わす術語をまだ用意していない、というのも、この種の直喩世界はカフカ以前にはまだ出現したことがないからである。」

ここにおいて氏は大きな、とっておきの疑問を提起する。「カフカが破壊したのは、「人間と事物の直理、さらには人間と事物の現実性」ではなく、人間と事物との関係を実は仮定的に繋ぎ支配していたにすぎないもの、ギリシャ・西欧的思惟の仮定的支配性ではなかったろうか。エムリッヒのいう「直喩的性格」とは、個と一般、具体と観念が不乖離的に共存するヘブライ的特性に対して、それとは知らずに迫ろうとした彼の造語ではないだろうか。エムリッヒの魅力ある標題を転用させて貰っていえば、物たちの叛乱、「蜂起する事物」とは、ギリシャ・西欧的思考の行きづまり、その支配の裂目から「蜂起するヘブライ的思惟」ということではないだろうか。作者が大きな影響を受けて出発したホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』にはじまるドイツ散文革命は、文学に限らず、哲学や言語学や諸芸術、そしてさらには物理学や数学など自然科学諸領域をも含む、19世紀と20世紀を分つ一大潮流と通底し、そこにこのヘブライ的思惟が大きく影を落していることについては、前々著（『カフカの「審判」』）で述べたところである。そしてそれがどのようにこの作者の達成に幸したかについても瞥見した（T・S『P』p.297～p.325 引用者注）」と言われる。来春再版の予定があるやに聞いており、小島信夫氏の序文の添わる同書を含めたレクチュールを通してカフカの特徴の現代的意味をあらためてみたい。

3 結び

無限、否定の鎖列、換喩について述べねばならない。けれども詳しくは「カフカの『アメリカ（失踪者）』」の最終章で、氏は「ひとつの考察——三長篇をつなぐもの」の一項を設けてあるのでその方にゆだねなければならない。ただ、氏自身の前記著述の「あとがき」に添えてある冒頭に引用した言葉ひとつをとってみても、具像と抽象がひとつに融け合いまいじり合い、氏のいうところのヘブライ的思惟の特質としての「換喩」がこのような短文にまでもあらわであるということ。しかも、人間存在の構造そのものともいべき表現のふしぎなリアリズム、「否定の鎖列」をひそませながら無限につづきかねない点を感じとっていたきたい。新しい時代の「詩」の発想源としてみても頗る刺戟的であり、魅力にみちている。

カフカ去れ一茶は来れおでん酒

（加藤楸邨・まぼろしの鹿・40年）

楸邨にとってカフカは去らなければならない異物にほかならなかったであろう。

だが、はたしてそんなものであろうか。

坂内氏の論考は、極めて時宜にかなった文字通りのアルバイトというべきもので、われわれ東洋の一日本人（新潟県）による専門分野外と思われる「透視者」によってなされたことに意義があり、ドイツをはじめ、学会なるものもつこの国の体質にもまた一石を投ずる新鮮な役割を演じている労作のように思う。

（1990・10・2記）